

どぼんどぼんあそぼう　くげんだいぶんのきんぐ

第六回　小説②

啓は、父の会社を統括するグループの会長が主催したパーティーにまだ若いながらも呼ばれ、出席した。啓より少し年上のまだ若い会長に、優秀な啓は気に入られ、目をかけられている。そのパーティーの後、会長秘書である梅子を見かけた。

九月十五日の月明かりの美しい夜のことだった。パーティーに出席した後、そのまま本社の近くのカフェで酔いを覚ましていた。ふと窓の外を眺めると梅子が会長に寄り添って歩いているのが目に入った。月の光に白く浮き上がった肌に真っ赤なドレスが厭らしくなく、美しく映えて見える。

「ああ、私も普通の身や心だったならば、きっとこのように会長のそばで右腕として働くことができているのに。よく考えたら男装で人前に顔を晒して世間に出ているなんて、全く正気ではない。」

そんな事を考え続けていると目の前が暗くなってくる。